

【解説】

第1問 世界史上のマイノリティ(少数派)

A

問1 正解④ (キリスト教の異端) 1

当初、ローマ帝国内で迫害されていたキリスト教は、ペテロ・パウロの伝道活動を経てコンスタンティヌス帝の「公認」を得ることとなった。まずはこの過程を P. 94 の年表で整理したい。

この後、キリスト教の拡大とともに正統教義の確認が必要となり、公会議における異端宣告も行われるようになる。P. 95 の 3 を見て、各公会議と異端とされた各派の関係をチェックしておく。また、正統教義の中核をなす三位一体説について、同ページのコラムも読んでおきたい。

①ネストリウス派が中国に伝わるのは唐代初期とされる。P. 118 の 1 でゾロアスター教・マニ教とともに三夷教の1つとされていることを確認したい。P. 77 の地図 D にはゾロアスター教・マニ教の伝播ルートも描かれている。唐代の長安にキリスト教寺院＝大秦寺(波斯寺)を建立したのもペルシア僧であり、同様のルートで伝播したのであろう。ネストリウス派の中国での盛衰を知る史料として、P. 119 掲載の大秦景教流行中国碑も重要。

②14世紀はキリスト教会の大分裂の時代であり、教皇権の衰退とウィクリフらの改革運動が見られた。背景にはフランス王権の伸長もある。P. 146 の 3 と 4 で概略をおさえ、フスの改革運動と処刑についても、その流れの中で理解したい。フスが異端とされたのはコンスタンツ公会議である。P. 194 の年表を見ると、フスの改革運動が1世紀の時を経て、ルターの活動につながっていくことがわかる。なお、トリエント公会議は対抗宗教改革の流れを決定付けた公会議であり、同じ年表に掲載されている。対抗宗教改革で重要な役割を果たし、日本でもお馴染みのイエズス会結成と合わせて、確認しておきたい。

③P. 95 の 3 参照。アリウス派はニケーア公会議で早々に異端とされ、三位一体説を唱えていない。

④十字軍と言えばイェルサレムに向かうものが代表的であるが、この時代の西欧諸国は聖地十字軍以外にも「キリスト教世界の拡大」を積極的にめざしていた。

P. 143 の[3]にまとめられているので参照し、レコンキスタや東方植民とともに、カタリ派に対するアルビジョワ十字軍も確認しよう。ここの解説にあるように、アルビジョワ十字軍の実施とフランス王権の伸長(②で前述)は関連している。

問2 正解③ (アフリカの歴史) 2

アフリカの歴史については、古代エジプトと植民地化以降に注目が集まりやすい。しかし、独自の歴史世界の形成を見落としてはならない。P. 130～131 にまとめられているので整理してみよう。

- ①P. 131 の[5]参照。ニジェール川流域では、ガーナ王国以降の諸王国が金・岩塩のサハラ交易で繁栄し、次第にイスラーム化していった。モノモタパはアフリカ南部の王国で、同ページの[6]参照。
- ②エジプトの象徴であるピラミッドは古王国時代のもので、クフ王のものが特に有名。P. 72 の[1]に関連事項が示されている。神官団と対立し、遷都や改名、種々の改革を断行したのはアメンホテプ4世。人物コラムを参照して、アマルナ遷都やイクナートンへの改名などを確認しよう。
- ③イスラーム世界の発展過程については、P. 126 の[1]の地図で追うのがよい。各時期のポイントも添えられている。また、イスラーム各国がどの民族系統に属するかは、P. 127 の[4]が見やすい。アフリカ内陸部のイスラーム化に深く関係しているベルベル系王朝に注目しよう。
- ④P. 257 地図[A]参照。イギリスの縦断政策とフランスの横断政策は必須の知識だが、マダガスカルがフランス領であったことは盲点だったかもしれない。

問3 正解④ (地中海地域のキリスト教諸国) 3

- ①P. 143 の[3]を見ると、レコンキスタの進展とからめてイベリア半島の情勢を理解できる。レコンキスタ終了後、スペイン・ポルトガル両国が「大航海時代」の先導役を務めることとなる(P. 182 の[1]参照)。レコンキスタ完了とコロンブスのサンサルバドル到達は同年(1492)の出来事である。
- ②P. 142 で十字軍を多面的に整理したい。参加者の中には商人や農民も居て、宗教的な熱狂だけで動いていたわけではない。ヴェネツィア商人が関係してラテン帝国建設に至ったのは第4回である。第7回など末期の十字軍は仏王ルイ9世が中心的役割を果たす。
- ③P. 136 参照。ノルマン人の移動はヨーロッパ全体に大きな影響を残した。北フラ

ンス・ノルマンディー公国成立とイングランド・ノルマン朝成立が，後の両国の対立につながっていくだけでなく (P. 147)，ロシア方面に移動したノルマン国家は次第にスラヴ化しながら，正教の受容という大きな変化をもたらした (P. 141)。両シチリア王国はイスラーム世界との接点となり，レコンキスタ時代のトレドとともに 12 世紀ルネサンスの拠点となった (P. 161)。アヴァール人はカール大帝に撃退された遊牧民である (P. 135 の年表参照)。

- ④ P. 139 の右下の表で，カトリックとギリシア正教の違いを整理したい。聖像崇拝の可否や皇帝と教会の地位をめぐる対立が，両教会の分裂につながった。同ページの年表では，レオン 3 世の聖像禁止令と東西教会の分裂 (1054 年) をチェックしたい。

B

問4 正解② (全インド=ムスリム連盟の結成時期) 4

P. 273 の5参照。イギリスはインドの植民地支配を容易にするため、ヒンドゥー勢力とイスラーム勢力の分断を狙った。ベンガル分割令はその具体例である。同ページの地図Cを見ると、イスラームの多い現バングラデシュの地域とそれ以外の地域に分割したことがわかる。ほぼ同時に、イギリスの支援で全インド=ムスリム連盟が結成され、後のパキスタン分離独立の伏線が生じた。このようなイギリスのやり方に対して、国民会議派の急進派が台頭することになり、反英運動の高まりの中で分割令は撤回される(1911)。

イギリスによる両教徒の分断政策は独立後も尾を引き、戦争や核実験強行などにその根深さが見てとれる(P. 297 の1参照)。

問5 正解② (ムスリムの君主・王朝) 5

①P. 180 の年表と地図参照。ゴール朝はアフガニスタンを支配したイスラーム国家であるが、その武将アイバクがインドに侵入し、デリー=スルタン朝を開いた。カージャール朝はイランを支配したイスラーム国家で、イギリスやロシアの圧力に苦しめられ(P. 243 の地図B)、反英運動や反専制の立憲運動を経験した(P. 243 の図「●イランとアフガニスタン」参照)。

②P. 142 の一覧表で第3回十字軍を確認。同じことは P. 126 の地図Cでもわかる。サラディンはファーティマ朝時代のエジプトで広まったシーア派に対抗して、スンナ派信仰を復興させた。彼の内政については同ページの人物コラムを読んでおきたい。

③P. 126 の地図でベルベル系王朝を確認しよう。ムラービト朝・ムワッヒド朝はアフリカからイベリアに進出し、レコンキスタをめざすキリスト教勢力と対峙した。アナトリアはビザンツ帝国領で、トルコ系のセルジューク朝がイスラーム化していく。その過程も同じ地図でわかる。

④P. 43 でマラッカ王国に注目。この国が明の朝貢交易圏とイスラーム商人の交易圏を結合し、東南アジアのイスラーム化を促進した。P. 160 の1の15世紀の図も見たい。また、P. 103 の地図Dでわかるように、東南アジア諸地域が植民地化されると、アチェ(スマトラ北部)・バンテン・マタラムのようなイスラーム国家が相互に競合しつつ、ヨーロッパ勢力に対抗するようになった。

問 6 正解② (世界史上の海上交易) 6

- a 南インドの諸王朝は盲点になりやすいので、P. 99 の 2 で一度は整理したい。チャョーラ朝は、全盛期にはスリランカや東南アジアに海を越えて進出していた。P. 35 の全体地図にも掲載されている。この王朝自体はタミル系であるが、地図でわかるようにムスリム交易圏の中心地として栄えた。
- b P. 210 の年表と P. 211 の地図で東南アジア進出の覇権が、ポルトガル・スペインからオランダに移っていく様子と、各国の拠点の整理をしたい。ゴアはポルトガルの拠点。特に重要拠点のマラッカはポルトガル領からオランダ領、さらにイギリス領と変遷する。P. 210 の年表に記されている時代のイギリスは、主にインドへ進出しているが、19 世紀に入るとインド・中国を結ぶ東南アジアへの進出を本格化し、オランダと勢力を分け合うことになる。P. 247 もあわせて見ると、大きな流れをつかめるだろう。

C

問7 正解③ (ロシアやソ連の対外関係) 7

- ① まずは P. 233 の地図と年表で、ロシアと清の間の国境条約の順番や、関連する地域を整理する必要がある。P. 170 と P. 204 の年表でわかるように一連の条約の最初にあたるネルチンスク条約は康熙帝とピョートル1世が締結している。今回出題されたアイグン条約はロシアの帝国主義的進出に伴う領土割譲条約と言える。直後の北京条約とともに、P. 250 の③でその内容や位置付けを確認しよう。
- ② P. 233 の地図と年表で、アレクサンドル2世時代のアラスカ売却を確認できる。アラスカは、後にアメリカ合衆国の1州となる。
- ③ P. 264 の地図A参照。ドイツと単独講和したソ連はブレスト=リトフスク条約でバルト三国を含む広大な地域を割譲する。次に P. 266 の地図Aでヴェルサイユ体制下のヨーロッパを見ると、そこにラトヴィアをはじめとする独立国が成立している。さらに P. 280 の①を見てほしい。英仏に不信感を持ったスターリンは独ソ不可侵条約を結び、第二次世界大戦勃発後には、ソ連のバルト三国併合とドイツのバルカン侵入がほぼ同時に起こる(同ページ年表参照)。独ソが勢力圏を分け合ったのである。
- ④ P. 285 の③で米ソ冷戦の「波」=緊張と緩和の繰り返しを見ておこう。フルシチョフの時代は、最初の雪どけの時代とキューバ危機という極度の緊張状態の両方を含む。その後、米ソはデタントの時代を迎える(軍縮条約締結)が、アフガニスタン侵攻によって緊張を高めたのもブレジネフであった。P. 310 の年表で見ておこう。アフガニスタンから撤退して、マルタ会談で冷戦終結に持ち込んだのはゴルバチョフである。

問8 正解③ (ヨーロッパの工業化) 8

- a 第一次世界大戦の時期は自明なので、短文が誤っていることも明らか。P. 255 のグラフなどを見れば、19世紀後半以降のイギリス・ドイツの工業力の伸び率の差がわかるから、グラフから直接両国を特定することも可能だろう。
- b P. 265 の年表を見て、戦時共産主義と国民経済の荒廃(グラフでは銑鉄生産がほぼ0になっている)→新経済政策による経済回復の兆し→2回の五カ年計画で社会主義型経済への改造(グラフが右肩上がりになる)という流れを理解しよう。このようなソ連経済の成功は国家の威信を高め、アメリカのソ連承認、ソ連の国際

連盟加入につながっていく。これと並行してスターリンの独裁化も進む。1つの
大国の形成期をしっかりと追っておきたい。

問9 正解④ (チェチェン紛争の勃発時期) 9

まず P. 293 の[4]を参照。冷戦終結に伴い、親ソ的・親米的政権が崩壊して各地で
民主化が進んだ。一方、大国におさえられていた民族宗教紛争が表面化することも
あった。旧ソ連地域で今も紛争が多いのは後者のタイプであり、答えはdとなる。
特にカフカス地域に属するチェチェン(ロシア連邦内の共和国)は、カスピ海油田か
らのパイプラインが通っており、石油利権と絡んでロシア軍の侵攻を受けてきた。
P. 312 の[1]と[2]を参照。冷戦後のロシアは天然資源の輸出を外交上の武器としてい
るため、介入せざるを得ないという側面も存在する。

第2問 世界史上の革命や政治体制の変化

A

問1 正解④ (世界史上の憲法) 10

- ①小中学校の知識であろう。
- ②P. 217 のチェックに合衆国憲法の特徴は整理されている。連邦制については、連邦政府の権限範囲に関する異論が当初からあり、制定直後のワシントン大統領の時代には早速修正されている。P. 216 の年表末尾参照。
- ③P. 268 の①の年表と P. 358 の史料解説参照。ヴァイマル憲法は表面的には極めて民主的だったが、大統領非常大権が認められていたため、後のナチスの台頭を許した。同憲法には女性選挙権も明記されていた。P. 263 のコラムで確認しておこう。
- ④P. 242 の②でオスマン帝国の改革の流れを整理したい。特にタンジマートではイスラーム型国家から法治国家への脱皮が意図され、アジア初の憲法制定に至った。しかし、このミドハト憲法は制定直後にロシア＝トルコ(露土)戦争の勃発で停止される。

問2 正解② (世界史上の議会・集会) 11

- ①まず P. 222 を見よう。ウィーン会議を主導し、ウィーン体制をつくりあげた立役者の一人がメッテルニヒである。次に P. 223 の年表を見てほしい。保守的なウィーン体制に反発する自由主義とナショナリズムの波が3回発生している。フランス二月革命に続く各地の革命や運動が、ウィーン体制崩壊の致命傷となった。オーストリアでもウィーン三月革命が起こり、メッテルニヒは失脚する。なお、フランクフルト国民議会も「第3波」のナショナリズム的動きの1つであり、ドイツ統一過程の小ドイツ主義を決定づけた。P. 229 の③も見よう。
- ②アテネ民主政の仕組みは基本事項。P. 80 の④で整理しよう。この時代の政治は成年男性市民のものであり、奴隷・女性・外国人は除外されている。ポリスという共同体そのものが、奴隷労働の上に成立していたこともおさえておきたい。同ページ下部に奴隷に関する記載もある。
- ③模範議会はイングランド議会の成立過程で登場する。P. 148 の②で確認しよう。同時代のフランスの身分制議会は三部会と呼ばれる。同ページ①の年表にフィリ

ップ4世の三部会招集が掲載されている。

- ④P. 264 年表参照。第1次ロシア革命で十月宣言が出され、ドゥーマ開設が約束されたが、ストルイピンの反動政治により国会は解散された。

問3 正解① (世界史上の共和政・共和国) 12

- a P. 227 の5参照。ルイ=フィリップは上層市民を優遇する政治を行い、二月革命を招いた。彼と特権階級の結びつきを批判する風刺画を読み解いておこう。革命で成立した第二共和政も長続きはせず、以降もフランスの政体は次々と変わる。同ページのもう1つの風刺画もなかなか面白いので、見てほしい。
- b P. 257 を参照。アフリカ分割はやみくもに覚えるのではなく、英仏の分割競争→ファショダ事件→英仏の協調(対独)というような流れを理解したい。地図では、アドワの戦いでイタリアをやぶったエチオピアと、アメリカで解放された奴隷主体で建国されたリベリアが、独立を維持しているのを確認してほしい。

B

問4 正解① (古代ローマの政治体制) 13

- ①P. 88 の年表を見ると，エトルリア人の王を追放して共和政を樹立したことがわかる。P. 89 の右上にあるようなローマ共和政は貴族と平民の身分闘争を経て確立されていくのであり，ローマ人は自らの政治体制に誇りを持っていた。だからこそ，カエサル独裁に対する反感も大きかったのである。
- ②P. 88 の左下にローマ史のキーワードが掲載されている。ローマでは，旧来の貴族であるパトリキと富裕化した平民を合わせたノビレスと呼ばれる階層が，官職・政權を独占した。平民会・護民官のような平民の政治参加のシステムも存在したが，政治面での身分差は最後まで残る。ここが，成年男性市民全員参加の民主政を達成したギリシアとは異なる点といえる。
- ③P. 90 の年表で確認。事実上の帝政を開始したのはオクタウィアヌスである。彼は共和政の伝統を利用し，できるだけ維持しているように見せながら，巧みな政治手法で権力を独占した。元老院からアウグストゥスの称号を得たのも，このような巧みさの表れである。自らは「皇帝」ではなく，市民の第一人者＝プリンキパトゥスと称した。コンスタンティヌス帝は，キリスト教によって帝權を神聖化し，官僚制を整備するなど，典型的な専制君主政を確立していった。
- ④P. 90 の年表末尾にある通り，ローマ帝国の東西分裂はテオドシウス帝の死後。この時既に，都市経済の発展した帝国東部と，ゲルマン民族の侵入を受け封建社会に移行しつつあった西部は，異質な地域となっていた。ユスティニアヌスは P. 139 で確認。東西分裂後，東ローマ皇帝となった彼はゲルマン国家を滅ぼし，地図Aのように，かつての「地中海帝国」の領土を一時回復した。

問5 正解② (ヨーロッパの中世都市) 14

中世ヨーロッパの商業圏については，P. 144 の2に詳しい。地中海商業圏に属するヴェネツィア等の諸都市が東方貿易で利益を得て，シャンパーニュを介して北海・バルト海商業圏と結び付いていた。北海方面のフランドル地方にはアントウェルペン（アンтверペン）の名前も見える。アントウェルペンはスペイン領ネーデルラントに位置し，現在はベルギーに属する。なお，イギリスやオランダの諸都市が商業で中心的役割を果たすのは大航海時代以降である。P. 183 の3を参照して，商業革命前後の世界商業の変化を確認しておこう。革命後のヨーロッパ商業の中心は地中海から大西洋

側に移り， ロンドンやアムステルダムが重要な結節点として発展していく。

問 6 正解④ (牢獄や投獄の歴史) 15

- ①③④P. 264 の年表参照。レーニンは二月革命後のロシアで四月テーゼを発表し，戦争継続をめざす臨時政府に対抗して，ソヴィエトへの権力集中を訴えた。この間，臨時政府の首相となったのがケレンスキーである。反革命的な動きを鎮圧してボリシェヴィキが主導権を握ると十月革命が起こった。レーニンは「平和に関する布告」を出して無併合原則や民族自決の理念を提唱し，第一次大戦の交戦国に衝撃を与えた。この直後に，民族自決などをうたうウィルソンの十四カ条が出された(P. 261 年表)のは，偶然ではない。同布告とともに「土地に関する布告」も採択され，地主の土地が没収された。
- ②第一次世界大戦は総力戦となった(P. 262 参照)。国民の負担や不満は大きく，ロシア革命・ドイツ革命につながっていく。キール軍港の反乱はドイツ革命の契機といえる事象である。P. 261 年表参照。

C

問 7 正解① (メキシコ革命) 16

メキシコの歴史と革命については P. 224 の 3 にまとめられている。アメリカとの戦争でカリフォルニアを失ったメキシコは、ナポレオン 3 世の干渉(メキシコ出兵)を受けた後、ディアス政権時代にアメリカ資本を導入して工業化をはかった。しかし、土地や資源をアメリカに支配される状態になったため、親米政権の打倒をめざす革命が起こった。サパタなどの指導のもとで革命は進展し、憲法制定後も石油産業国有化などの自立化政策が続いた。

問 8 正解② (国民政府統治時代の中国) 17

P. 274 年表を中心に確認したい。清朝滅亡後の中国では、国民党政権と共産党側の対立に加え、中国支配を強めたい日本などの列強の圧力、列強の支援を受ける軍閥の存在が関係して、混乱を極めた。日本や軍閥に対抗するため、国民党と共産党が協力(合作)する場面も見られた。

③ 浙江財閥と米英の支援を受ける蒋介石が北伐を完成し、国民政府が中国を統一するのは 1928 年である。この頃から共産党掃討も本格化し、対抗して瑞金に中華ソヴィエト共和国臨時政府が成立する。

④ 日本の進出に危機感を持った共産党が 1935 年、八・一宣言を出し、再び抗日のため合作することを呼びかけた。

② 国民政府は日本軍の侵攻にともなって重慶に移るが、汪兆銘がここから脱出し、南京で日本の傀儡政権の首班となる(P. 281 年表)。和平交渉進展を期待したと考えられる。

① 第二次世界大戦に関連する連合国の首脳会談については、P. 282 の 3 で整理しておきたい。どこで何が話し合われたかだけでなく、スターリンが参加するのはいつからか、蒋介石が参加したのはカイロ会談のみであること、カイロ会談の中身は対日戦後処理であること、などを確認しよう。

問 9 正解④ (各国の民主化政策・民主化運動) 18

① P. 311 で、東欧各国が経験した反ソ暴動やその鎮圧について整理したい。また、ソ連の後ろ盾を得た独裁者も多かったため、1989 年以降の東欧革命で彼らが打倒されていく過程も確認しておこう。チャウシェスクはルーマニアの独裁者。

- ②P. 296 の年表参照。韓国の戦後史は、軍事クーデタで政権を握った朴正熙らの大統領と、金泳三以降の文民大統領の時代を分けて考えたい。朴正熙は民主化を弾圧した側である。
- ③P. 295 の⁵参照。中国の高度経済成長の基礎を築いた鄧小平であるが、民主化運動は弾圧した。天安門事件の様子はテレビ映像でも各国に配信され、衝撃を与えた。九・三〇事件はインドネシアのクーデタで、スカルノからスハルトへの政権交代の契機となった。P. 298 の²参照。
- ④現代台湾については P. 295 の⁶参照。台湾では、古くから住んでいる本省人と、戦後大陸から移住した外省人の対立も根強い。蔣介石の死後しばらくは外省人による政権が続いたが、李登輝が初めて本省人の総統となり、民主化を進めるとともに、柔軟な外交政策をとった。

第3問 国家が諸地域を統合するために採用した制度

A

問1 正解② (世界史上の土地制度・税制) 19

- ①P. 91 の[4]参照。共和政期に属州が獲得されると、大土地所有(ラティフンディア)が成立していった。このため自作農が没落し、官僚制や軍事費を支えるため都市への重税も課されるようになると、都市市民の一部が農村に所領をかまえ、小作人を利用して所領経営を行うようになった。コンスタンティヌス帝の時代に職業と身分が固定化されると、小作人の地位も奴隷的となり、後の荘園制につながるコロナトゥスが成立した。
- ②P. 126 の[2]参照。アッバース朝の衰退に伴い、イスラーム世界に大きな変動が起こった。まず、カリフの権力が宗教面でムスリムを統合する象徴的役割に限定され、それぞれの地域の政治的・軍事的支配権は大アミールやスルタンが担うこととなった。また、これらの政治的支配者は、部下である軍人に俸給を支払うのではなく、それに見合うだけの地域徴税権を与えるようになった。これがイクター制であり、ブワイフ朝からイスラーム世界で広く採用された。
- ③均田制の仕組みはP. 117 の[6]に詳しい。均田制と呼ばれる土地支給制度と同時に実施される租調庸制(税制)や、均田農民から軍事力を確保する府兵制も、魏晋南北朝時代の北朝に起源がある。P. 114 や後見返しも見ておきたい。
- ④P. 179 参照。オスマン帝国は広大な領域と異民族を安定的に支配するため、独特の統治機構をつくりあげた。帝国中央では官僚制が採用され、帝国周辺部では各地の伝統的体制を残したり、在地有力者の権威を利用した。また、外国人や異教徒にも寛容な体制をしいた。バルカン・アナトリアなどの要所は直轄領とし、シパーヒーと呼ばれるトルコ系軍人に地域徴税権を与えた。これがティマール制であり、イクター制の影響が感じられる。

問2 正解③ (思想・言論・宗教に対する国家の介入) 20

- ①P. 170 の[2]参照。満州族の王朝である清は、懐柔策と威圧策を使い分けて漢人を統治した。文化面で言えば、康熙字典などの編纂事業を行い、科挙を存続することで儒教文化を尊重する姿勢を見せ、一方で、「文字の獄」と称される反満思想の取り締まりを実施した。初期の考証学は文字の獄を反映して、儒教の古典を研

究するが、現実政治と切り離す傾向が強いと言われる。朱全忠は唐を滅ぼして後梁を建てた人物。唐の滅亡への社会変動については P. 120 の¹参照。唐朝の衰退に伴い、国境防備のために設置されていた節度使が内地にも置かれるようになり、その節度使に対する統制もきかなくなって自立化(藩鎮化)が進んだ。このような中で、困窮した農民の反乱＝黄巢の乱が起こると、反乱の指導的立場の一人であった朱全忠が唐を倒すに至った。

②曹操は赤壁の戦いで有名な人物。P. 113 の²参照。戦いの後、曹操は魏王となり、次代の曹丕が漢王朝献帝からの禅譲を受けることになる。焚書・坑儒は始皇帝の強権的政治の象徴。P. 109 の²参照。

③P. 268 や P. 269 を見て 1920 年代の世界をイメージしよう。イタリアやドイツではファシズムが芽ばえ、日本でも軍部の台頭や思想弾圧が明確化していく。コラムに登場する治安維持法も世界史の中で位置付けよう。

④P. 226 の¹で 19 世紀のイギリスをイメージしよう。この時代のイギリス国内では、自由主義的改革が進んだ。選挙法改正やカトリック教徒解放法制定、穀物法廃止などである。一方、対外的には自由貿易主義を掲げ、受け入れない国に対しては戦争も辞さず、帝国主義的に振る舞った。

問 3 正解④ (ヨーロッパ人による探検)²¹

P. 183 を見ると、大航海時代の探検が一望できる。この時期には、太平洋方面・アフリカ内陸・両極には手が届いていなかった。アフリカ内陸を探検したリヴィングストン・スタンリーについては P. 257 の地図^Aで確認。タスマンやクックの太平洋探検については P. 259 の地図でわかる。いずれも、列強による植民地化の先駆けである。上記の探検家に加えて、両極に到達した人物も P. 241 の一覧に掲載されている。

B

問4 正解④ (隋の進めた大運河の建設) 22

中国の歴史上、黄河の治水も重要な事業であるが、今回の文脈では隋の文帝・煬帝による大運河の建設が正解。P. 116 の[3]を参照し、江南と華北の王都(当時は大興城)が物流面・経済面で結び付いたことを確認しよう。大運河の整備はその後も行われた。特に、元代の整備によって、陸上の駅伝制とムスリム商人の活躍する海上交易ルートが円滑に結び付き、全ユーラシア規模のネットワークの要になったことは重要である。P. 160 や P. 164 で全体像を把握しておこう。また、大運河の開通に伴い、中国の歴代王都の位置は黄河流域から開封などの運河沿い、あるいは南京などの長江流域に移動していく。P. 61 の[4]を見ると、その様子も分かるだろう。

問5 正解③ (諸国家・諸勢力の交流・対立) 23

- ①中国と周辺民族(北方および内陸)の関係は必須事項であり、P. 156 の[2]と P. 157 の[3]で整理したい。秦・前漢の時代に対峙したのは匈奴。P. 11 の地図でもこの関係は確認できる。また、P. 109 の年表で、始皇帝時代の蒙恬による対匈奴戦争や長城建設も、関連事項として見ておきたい。契丹は五代十国～北宋時代の中国を悩ませた。P. 152 の年表や地図を見ると、契丹が五代十国時代に燕雲十六国を得たこと、北宋に対しても軍事的に優位であり、澶淵の盟が締結されたことなどを確認できる。
- ②P. 199 の[3]を参照。カルヴァン派の多い北部がユトレヒト同盟がスペインから独立する。カトリックの多い南部はスペイン領として残存した。その後のネーデルラントの紆余曲折については P. 222 も参照。P. 198 の[2]も見てほしい。オランダの独立と無敵艦隊の敗北でスペインの覇権は終わりを告げ、オランダの覇権が始まる。発展的な学習として、アムステルダム の繁栄や覇権国家オランダの世界システム上の位置付けについておさえるのであれば、P. 197 が有効。
- ③アメリカのラテンアメリカ諸国への帝国主義的進出については P. 259 の[1]・[2]参照。セオドア=ローズヴェルトの棍棒外交などが典型的である。第二次世界大戦後のアメリカはラテンアメリカ諸国とOASを結び(キューバは除く)、現地の大地所有者や資本家を支援して影響力を維持した。このため、ラテンアメリカ各地に親米的な独裁政権が生まれる一方、民主主義・社会主義を掲げてアメリカと対立する国も生まれた。このあたりについては P. 307 の[3]を参照してほしい。親

米的なバティスタ政権を打倒したカストロによるキューバ革命も、上記のような流れで理解したい。

- ④P. 22 の 5 世紀, P. 24 の 6 世紀の全体地図でエフタルの盛衰を見よう。突厥・ササン朝・グプタ朝の各方面に進出したエフタルは、やがて、突厥・ササン朝の同盟によって滅ぼされる。ムガル帝国の盛衰については P. 180 の年表および地図 **D** 参照。アクバルは非ムスリム勢力との和解に務めたが、アウラングゼーブがジズヤ復活などでヒンドゥー教徒を抑圧した。結果として、ラージプートやシク教徒の離反を招き、英仏の進出も加わって滅亡に至る。

問 6 正解② (唐代中後期の出来事) **24**

- ①五胡十六国については、P. 114 の年表と地図で整理したい。中でも鮮卑の建てた北魏は華北を統一し、均田制の導入など、隋唐帝国以降の中国に残る影響を与えた。また、南北分裂の時代にそれぞれの地域で独特の文化が生まれた。北朝では石窟寺院の開削や西域からの渡来僧の往来に見られるように、儒教に代わるイデオロギーとして国家仏教が栄えた。南朝では、文学や書画が漢人貴族によって発展した。P. 115 の **2** も見ておきたい。また、P. 154 の **3** でわかるように、南北朝時代は移住者の増大に伴って、江南開発が本格化した時期ともいえる。
- ②P. 117 の **6** でわかるように、唐では均田農民に税負担(租調庸)と兵役(府兵制)を求める形がとられた。しかし、貴族による荘園形成を押さえ込むことができず、均田制が崩壊すると租調庸制と府兵制も維持できなくなり、募兵制に変化していく。P. 120 の **1** で流れを理解したい。募兵(傭兵)を管轄する節度使の専横から安史の乱が起こるという皮肉な結果も生んだ。
- ③清朝の支配領域の拡大については P. 170 の **1** と P. 171 の **3** を参照。中国北東部を拠点とする満州族は、順治帝時代に中国本土をほぼ統一したほか、北方の旧モンゴル勢力・内陸のイスラーム勢力およびチベット族の平定を進めていった。満州と本土以外は藩部として間接的統治を行ったが、乾隆帝時代になってようやく帰順したのがジュンガル部であった。難敵ジュンガルを平定し、対ヨーロッパ貿易を広州のみに制限した乾隆帝中期が、清朝の権威の絶頂といえるだろう。なお、P. 41～P. 49 の全体地図を順に見ると、元朝崩壊以降もモンゴル勢力が北方に残存している様子がわかる。
- ④ロシアが沿海州を獲得するのは 1860 年の北京条約のとき。P. 250 の **3** 参照。ロシア史として確認するなら P. 233 の **3** が良い。この後、ロシアはウラジヴォストー

クを建設し，太平洋側への出入口を獲得する。シベリア鉄道・東清鉄道の重要性も地図を見ればよくわかる。

C

問7 正解④ (世界史上の貨幣・貨幣制度) 25

- ①②後見返しに各時代の貨幣の変遷も掲載している。東周時代＝春秋・戦国時代は様々な青銅貨幣(P. 107)。五銖銭は前漢時代のもの(P. 110)。交鈔はモンゴル時代の紙幣である(P. 163 右下)。交鈔の濫発が紅巾の乱の一因となる(P. 163 の④参照)。
- ③ストルイピンは第一次ロシア革命の結果を裏切って反動政治を行った首相(P. 264 の年表)。レンテンマルクは第一次大戦後のドイツで発行された。P. 269 の③を参照。対独復讐熱のおさまらないフランスから、とてつもない額の賠償金を負わされ、ルール工業地帯も占領されたドイツは、破局的インフレに見舞われた。この危機を乗り越えるため新紙幣レンテンマルクが発行された。
- ④P. 276 の③参照。世界恐慌の影響が大きかったソ連以外の主要国は、金本位制を維持できなくなった。英仏米の金本位制停止を確認したい。植民地等と経済ブロックを形成して危機を乗り越えようとした国々に対して、日独伊などでは軍事的海外進出の強化とファシズムの台頭が見られた。

問8 正解④ (世界史上の傭兵・兵士) 26

- ①政治的にも軍事的にも共同体意識の強い古代ギリシアのポリスでは、武装自弁の原則のもと、市民が重装歩兵となって自らのポリスの防衛に携わった。P. 81 の⑥参照。また、武器を買えない無産市民でも軍艦の漕ぎ手として活躍する道があった。P. 81 の⑤で、重装歩兵の活躍したマラトンの戦い(アテネが勝利)・テルモピレーの戦い(スパルタ軍全滅)・プラタイアの戦い(ギリシア連合勝利)、三段櫓船が活躍したサラミスの海戦などを見ておこう。一方、これらの軍事力はポリス同士の戦争にも利用された。同ページ⑦のペロポネソス戦争が典型である。
- ②P. 90 の①の年表末尾と P. 134 を参照。オドアケルは西ローマ皇帝を廃位して、イタリアに王国を形成した。
- ③P. 200 の①を参照。細かい事象を確認する前に、三十年戦争が、長く続いてきたカトリックとプロテスタントの対立およびフランス王家とハプスブルク家の対立を背景にしていることを理解しよう。カトリック国フランスがプロテスタント側に付いているのは、重要なポイントである。戦争経過では、カトリック・皇帝側のヴァレンシュタインとプロテスタント側のスウェーデン王グスタフ＝アドルフは知っておきたい。戦争の結果として、カルヴァン派の承認、ハプスブルク家

が皇帝位を受け継ぐ神聖ローマ帝国の事実上の崩壊，などにも目を向けたい。

④インド大反乱については P. 244 の²に詳しい。

問 9 正解③ (国家の統治制度・軍事制度) ²⁷

- a P. 139 の年表と比較表参照。プロノイア制はビザンツ帝国後期に導入される封建的制度。モスクワ大公国はモンゴル人の支配(タタールのくびき)から独立した，現ロシアにつながるスラヴ人国家。P. 141 に掲載。
- b P. 110 の²参照。秦は従来の封建制にかわって，中央から官僚を派遣して全土を統治する郡県制をしいた。しかし，漢の高祖は集権的・強権的すぎる郡県制にかえて，地方では一族・功臣に支配を委ねる郡国制を採用した。ただし，地方の諸侯国は次第に衰退し，武帝時代には実質的な郡県制に戻った。

第4問 世界史における自然環境・資源と人間との関わり

A

問1 正解④ (インカ帝国の歴史) 28

アメリカ大陸の古代文明の概略については P. 185 の地図参照。同ページにコルテスがアステカ文明を、ピサロがインカ帝国を滅ぼした事実も掲載。鉄砲や馬など、インディオにとって未知なる武器は、絶大な威力を発揮した。

問2 正解④ (アメリカ大陸の銀とその流通) 29

アメリカ大陸とヨーロッパの交流開始によって、様々なものが「交換」「流通」するようになった。P. 186 に概略が示されている。中でも銀の流通は、世界経済の発展に大きく影響した。こちらは P. 187 にテーマ史としてまとめられている。ポトシ・アカプルコ・マニラというスペイン領経由の銀流通ルートをおさえておきたい。17世紀には上記のメキシコ銀に加えて、石見銀山産の日本銀も流通が増える。同ページにグラフがあるので見ておきたい。

問3 正解③ (世界史上の海戦) 30

①アントニウスについては P. 89 の人物コラムに登場。クレオパトラと連合してアクティウムの海戦に敗れた。この海戦はローマ史で言うと、アフリカ属州化の最終局面になる。P. 91 の地図で確認。また、P. 82 では異なる見方ができる。アレクサンドロスの帝国が崩壊した後のギリシア系諸王朝のうち、最後まで残ったのがプトレマイオス朝である。アクティウム海戦でこれが滅亡するので、同海戦はヘレニズム時代の終焉を意味している。

②P. 220 の 3 参照。ナポレオンの大陸支配に対抗したイギリスの存在感を認識したい。

③ヨーロッパ勢力とオスマン帝国の戦いについては、P. 178 で整理したい。コンスタンティノープルや第1次ウィーン包囲は、ヨーロッパ人にとって衝撃が大きかっただろう。プレヴェザの海戦にも勝利を収めたスレイマン1世の時代が最盛期である。同時期のヨーロッパは宗教改革の時代で、当時の国際情勢にオスマン帝国が関わっていた (P. 195) ことも想起したい。その後、レパントの海戦に敗れたオスマン帝国であるが、17世紀いっぱいには覇権を握り続けた。

④P. 281 参照。ミッドウェー海戦の敗北が日本軍劣勢への転機となる。この後、すぐにガダルカナルの戦いが始まり、各地で撤退や玉砕に追い込まれていくのである。

B

問 4 正解② (世界史上の自然哲学・薬学) 31

- a ギリシア哲学については P. 84 参照。中でもタレスは初期に登場する。
- b 明朝時代の経済発展や宣教師との接触は実学の隆盛も生み出した。P. 173 で主な成果を確認しよう。マテオ=リッチなどの著作も見られる。

問 5 正解① (東南アジアの港市国家) 32

P. 49 を見よう。オランダ支配の拡大に対して、アチェ・バンテン・マタラムなどのイスラーム国家も存続している。次に P. 102 の①と②を見よう。東南アジア史は、インド・イスラーム・ヨーロッパなどから様々な影響を重層的に受けたことに特徴がある。ベトナム北部は中国および儒教の影響が強いものの、南部のチャンパーはインド文化の影響を強く受けている。

問 6 正解② (船の歴史) 33

- ① P. 261 右下参照。アメリカの参戦理由の 1 つに、ドイツによる無制限潜水艦戦がある。
- ② 三段櫓船とサラミスの海戦については P. 81 参照。櫓船の漕ぎ手が政治的発言力を高め、アテネ民主政が完成する。
- ③ 産業革命における技術発展については P. 213 の①。飛び杼が織布力を高めたので、紡績力の向上も必要となり、ハーグリーブズらの紡績機の発明が生じた。このことが織布能力の向上を刺激し、カートライトの発明につながる。蒸気船の発明については、ワット→フルトンの流れをおさえたい。
- ④ 亀甲船は朝鮮水軍の用いた「軍艦」であり、豊臣秀吉の朝鮮侵略時に活躍した。P. 175 の人物コラム参照。水軍司令官の李舜臣は国民的英雄である。琉球が中国との冊封貿易や朝貢に使用したのは進貢船であり、P. 169 右上に掲載。海上ルートで明に朝貢した回数は、琉球が飛び抜けて多かった。

C

問7 正解① (河川・水路の整備・開発の歴史) 34

- a スエズ運河開通はムハンマド=アリー朝時代のエジプト。P. 243 を参照して、運河開通がイギリスに利益をもたらしたことが、エジプトに財政難と対外従属を招いたことが、確認したい。
- b アメリカのTVA設立はニューディールの主要政策の1つ。P. 276 の2参照。
- c ナセル時代のエジプトはアラブ世界の盟主であった。P. 300 の人物コラム参照。アスワン=ハイダム建設のためにスエズ運河を国有化し、イギリス資本から奪取するなど、強力なリーダーシップを発揮した。次代のサダト大統領はイスラエルと和平を結ぶなど、方向転換した。

問8 正解① (清末の民衆運動) 35

- ①アッカド人はシュメール人の都市国家の後、メソポタミアで初の領域国家を築いた。P. 71 の3参照。鉄製武器の使用で台頭したのはヒッタイトであり、同ページの4に詳しい。ヒッタイトはさらに馬に引かせる戦車も利用し、エジプト新王国とシリアの覇権を争った。P. 70 の1の年表も参照。鉄・馬・戦車を組み合わせて初の「世界帝国」となるのがアッシリアである。
- ②クシュ王国については P. 131 の4に掲載。製鉄業の発展した黒人王国で、一時エジプトも支配した。
- ③P. 144 の2参照。フィレンツェは地中海商業圏に属する。ハンザ同盟都市とその在外商館は北海・バルト海商業圏の中心的存在。中世ヨーロッパの都市は商業活動発展のための「自由」を渴望した。自由都市や自治都市のあり方について、同ページの3も見ておきたい。
- ④P. 213 の1に掲載。ジョン=ケイの発明は綿織物関連。

問9 正解① (18～19世紀の科学) 36

P. 238 の2参照。ゲーテ・シラーはともに古典主義の文学者であるが、その作品にはロマン派の香りも濃く漂う。リンネは P. 206 の2に掲載の植物学者。メンデルは P. 241 に掲載されており、遺伝学の発展に貢献した。